

第一朗読「出エジプト記 19章2―8節」

- 2 彼らはレフィディムを出発して、シナイの荒れ野に着き、荒れ野に天幕を張った。イスラエルは、そこで、山に向かって宿営した。
- 3 モーセが神のもとに登って行くと、山から主は彼に語りかけて言われた。「ヤコブの家にこのように語り  
イスラエルの人々に告げなさい。
- 4 あなたたちは見た  
わたしがエジプト人にしたこと  
また、あなたたちを鷲の翼に乗せて、わたしのもとに連れて来たことを。
- 5 今、もしわたしの声に聞き従い  
わたしの契約を守るならば  
あなたたちはすべての民の間であって、わたしの宝となる。  
世界はすべてわたしのものである。
- 6 あなたたちは、わたしにとって、祭司の王国、聖なる国民となる。  
これが、イスラエルの人々に語るべき言葉である。」
- 7 モーセは戻って、民の長老たちを呼び集め、主が命じられた言葉をすべて彼らの前で語った。  
8 民は皆、一斉に答えて、「わたしたちは、主が語られたことをすべて、行います」と言った。

言葉の解説

■エジプトを脱出した民は荒れ野でつぶやきながらも、シナイへと導かれる。出19章からシナイでの出来事が描写されるが、シナイを出立するのは民10章。モーセ五書全体の約30%がシナイの出来事の描写に費やされている。

2節 ■「レフィディム」。この地は喉の渇きに不平をつぶやいた民が岩からほとぼしり出た水を飲み（出17:1-7）、アマレクと戦い（17:8-16）、モーセを訪れたしゅうとエトロが共同体の紛争処理について忠告した場所（18:1-27）。 ■「山に向かって」。「向かって」と訳された語（ネグド）は「目の前に置いて注意を払うべきもの」を表す。詩一六八に「わたしは絶えず主に相対しています」とあるように、目の前に置くべきものは神。「山」は神が顕現する場。

3節 ■「語りかけて」。動詞カーラーは創四26「主の御名を呼び始めた」にも、出三三19「主という名を宣言する」にも使われている。

4節 ■「あなたたちは見た」。ヘブライ語の動詞は人称・数・性によって変化する。ここでの「見た」は二人称複数男性形であるが、強調のために人称代名詞「あなたたち」が加えられている。神が行ったエジプト脱出を「見れ」ば、その方に「聞く」ことになる。 ■「鷲」。3頁の言葉の広がり参照。

5節 ■「聞き従う」。動詞「聞く」の前に同じ動詞「聞く」の不定法を置く強調構文。直訳すれば「聞きに聞く」であり、「必ず聞く」の意味。 ■「わたしの宝となる」。申命記が好む表現（申七6、一四2）。

6節 ■「祭司の王国」。すべての民族のために神に執り成しをすることを使命とする民。

①出エジプト記はこの19章からシナイに到着したイスラエルについて語り始める。シナイを立出するのは民数記10章だから、モーセ五書全体から見ると、その30パーセントがシナイの描写に費やされていることになる。このような数字からも、シナイの重要性が理解できるが、記事のうち出来事の描写はわずかであり、ほとんどは掟集になっている。

出19章から始まるシナイに関する描写の中でも、特に重要なのは出19―24章だと言える。シナイでの神顕現に始まり(19章)、「十戒」と「契約の書」の宣布が続く(20―23章)、最後に神と民の契約が述べられているからだ(24章)。この19―24章は旧約聖書で最も重要な意味を持つ箇所の一つである。今週の朗読はその冒頭部に当たる。

シナイの荒れ野に到着した民は山に向かって宿営するが、このシナイの山がどの山のことか、その位置をめぐってさまざまな意見がある。だいたいはシナイ半島南端のジェベル・ムーサー(海拔二二八五メートル)を考えるが、位置を特定することよりも、出来事の意義を考えるほうが大事なほうでもない。新約聖書でも山は特別な意味を持っているが、旧約聖書でも神顕現の場所として重要な役割を担っている。この「山に向かって」天幕が張られる。

モーセがその山に登って行くと、神が彼に語りかける。神は「ヤコブの家にこのように語り…告げなさい」と指示してから、告げるべき内容を説く。それは次の三点から成り立っている。

①まずは「あなたたち」が体験したことを確認している(原文では二人称複数の動詞形「見た」の前に、文法的には必要のない人称代名詞「あなたたち」を置き、「あなたたち」を強調している)。民が思い起こさねばならないことは、神が「エジプト人にした」奇跡だけではない。彼らを鷲の翼に乗せ、神との出会いのために「わたしのものと」連れて来たことにも心を留めるべきである。なぜなら、シナイの山での出会いによって、民は「神の民イスラエル」とされ、救いの計画の中で重要な使命を帯びることになるからだ。

②次に、5節でイスラエルの選びが述べられる。この選びは、4節に述べられた「あなたたちが見た」ことに基づいているから、5節の文頭に「そして今」(直訳)が置かれている。民がすでに体験したことに目を向けるなら、今、取るべき態度が何であるかは自明である。それは「わたしの声に聞き従い、わたしの契約を守る」ことである(「聞き従う」を直訳すると、「聞きに聞く」となり、一種の強調構文)。そうすれば、すべての民のなかで神の「宝」となります。しかし、この恵まれた地位は神の偏愛を表しているわけではありません。「世界はすべてわたしのもの」とあるように、神の視野はイスラエルに限定されることなく、全世界に広がっている。

③最後に6節では、神の民が担うべき使命が示される。彼らは確かに「聖なる国民」であり、神のものとして神によって取り分けられた国民であり、祭司の任務を担うべき「祭司の王国」である。一般的に祭司は神と民を結ぶ仲介者であり、イスラエルが「祭司の王国」とされたのは、神と全世界とを結ぶ結び目となるべき使命を帯びているからだ。イスラエルの選びは全世界のための選びだが、イスラエルが受けたこの使命は、新たなイスラエルである新約の民に受け継がれている。我々が集うのは、この使命を再び自覚するためである。

④言葉の広がり「鷲・ネシエル」。

聖書に登場する鷲(ネシエル)は、現在は絶滅の危機にあるシロエリハゲワシのことだとされる。この鷲は両翼を広げると三メートルになる大型の鳥であり、死んで腐敗した生き物をも食べることから、食用を禁じられた汚れた鳥とされているが(箴三〇17、レビ一13)、羽毛が生え変わることで、また長命であることから、再生力の象徴にもなっている(イザ四〇31)。

またスピードの速い鳥だから、すばやく襲い掛かる敵(ホセ八一)や俊敏な人間を表すためにも使われる(サム下1-23)。さらに、人の近づくことのできない岩棚に巣をつくり、ヒナを強い日差しや寒風から守り、幼鳥の初飛行の際には、申三二11が「鶯が巣を揺り動かし、雛の上を飛びかけり」と述べるように、彼らを励まし勇気づけ、場合によっては羽を広げて雛を「捕らえ、翼に乗せて運ぶ」ことがあるほど幼鳥に気配りする鳥である。だから、民を導く神の愛を表すたとえにもなる。今日の朗読では、エジプトから民を導き出した神が、雛を翼に乗せて運ぶ鶯にたとえられている。

## 第二朗読「ローマの信徒への手紙5章6-11節」

6 実にキリストは、わたしたちがまだ弱かったころ、定められた時に、不信心な者のために死んでくださった。7 正しい人のために死ぬ者はほとんどいません。善い人のために命を惜しまない者ならいるかもしれませんが。8 しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。9 それで今や、わたしたちはキリストの血によって義とされたのですから、キリストによって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。10 敵であったときでさえ、御子の死によって神と和解させていだいたのであれば、和解させていただいた今は、御子の命によって救われるのはなおさらです。11 それだけでなく、わたしたちの主イエス・キリストによって、わたしたちは神を誇りとしています。今やこのキリストを通して和解させていただいたからです。

### 言葉の解説

6 節 ■「弱かった」。この「弱さ」は被造物が神に対して持つ弱さ(詩一〇三9-16)。■「定められた時に」。直訳は「時節に従って」。「時節」と訳したのは名詞カイロス。この句は「定められた時に、時が至って」の意味にも、一般的に「その時」の意味にもとることができる。後者であれば、「私たちがまだ弱かったその時」となり、「弱い私たちのためにキリストが死んだ」というようにキリストの死の意義が強調される。前者であれば、絶対的な自由を持つ神が定めた時に、キリストがその業を行ったことが強調される。■「不信心な者」。契約への誠実さを欠いた人々のこと。

7 節 ■「善い人」。「恩人」、「貴重な人」、あるいは、マカベア時代の殉教者が背景にあるなら、信仰を守る「敬虔な人」。いずれにしても、自分の命を引き換えにするだけの価値のある人のこと。

8 節 ■「示す」。この動詞は、もとは「一緒に置く」を意味する。神の愛は私たちと一緒に置かれ、示されている。

9 節 ■「神の怒り」。真理を妨げる人間の不信心と不義に対して神の怒りが天から現され(ロマ18)、かたくなな心を改めない者は神の怒りを蓄えている(ロマ二5)。■「救われる」。最後の審判の時に与えられる救いの完成を指す。

10 節 ■「御子の死によって…御子の命によって」。9 節と並行する句。御子の「死と復活」と述べることによって、現在の和解と将来の救いの間にキリスト者が置かれていることを強

調する。

11節■「神を誇りとしています」。この誇りは、今の恵みと神の栄光にあずかる希望を誇り(五2)、さらに「苦難」をも誇る(五3)。

①今日の朗読の五6―11は、五1―5の主題と対応するように書かれている。五1―5は「信仰によって義とされ、神の平和を得て、神の栄光にあずかる希望を誇りとし、苦難をも誇りとしている。それは、神の愛が注がれているからである」と述べ、五6―11は「弱く、不信心で、罪人である私たちのためキリストが死んだことに、神の愛が示されており、キリストの血によって義とされ和解を得た私たちは神を誇りとしている」と展開している。キリスト者が苦難の中でも希望を持ち、その「希望はわたしたちを欺くことはありません」と確信することができるのは、「神の愛」が私たちの心に注がれていると知っているからです(5節)。今日の朗読は、キリストの十字架に示された「神の愛」がどのような愛であるかを説き明かしている。

神の愛はキリストの死によって私たちの心に注がれている。6節は「イエスは死んだ」とは言わず、「キリストが死んだ」と述べている。ロマ書で「イエス・キリスト」と言わずに、「ただ「キリスト」と述べるのは6節が最初である。そして8節でも「キリストが死んだ」を繰り返している。「キリストの死」を述べる背景には、イエスが十字架に死んだことは彼がキリスト(メシア)であることを否定する証拠にはならない、というキリスト者たちの信仰が背景になっている。イエスは十字架にかけられた者としてキリストなのである。

しかも、キリストは「わたしたちがまだ弱く、罪人であったとき」に死んでいる。キリストがその死によって神の愛を現す対象とされた「私たち」は、「不信心な者」であり(6節)、さらに「敵」とまで呼ばれている(10節)。実に、人間の目から見れば、「私たち」は愛されるに値しない者である。

「不信心な者」とは、契約に対する誠実さを欠いた人たちのことであり、「罪人」のことであり、「罪人」という語を使うことによって、キリストの死が神からの一方的な贈り物であったことが明らかにされる。神の愛は契約に留まる敬虔な者だけでなく、契約に反した罪人にも向けられている。キリストは、神に創られた被造物としての状態から背いてしまった私たちのために死んだ。私たちが贖いをする必要とするのは、被造物だからではなく、「背いた被造物」だからである。神の愛はそれを受けるに値しない者に向けられている。神が愛するのは、その対象に何かの価値があるからではなく、神自身が愛したいからに他ならない。

キリストの死が常識を超えた特異なものであることを強調するために、人間が他者のために死ぬ場合(7節)と比較している。人間が他者のために死ぬことはあり得るが、それは「ほんどいらない」程度のものであり、しかも「善い人」のための死ではない。人間が他者のために命を捨てる死は、自分にとって価値あるもののためだが、キリストの死はそのような死ではない。キリストの死は不信心な者を救うためであり、「敵」のための献身である。

キリストの死は、人間が他者のためになし得るかも知れない死とはまったく異質な死である。人間がなし得ない死だからこそ、イエスの十字架には神の愛が現れている。しかも、神からの一方的な贈り物として、私たちは「義とされ」、「和解」を与えられているのだから、私たちが救いが奪われることはない。神の愛は人間の愛とは違って、変わることもあり得ないからだ。だから、キリスト者は「神の愛を誇りとし、希望は私たちが欺くことがない」と確信している。キリスト者はこの確信に生きる人なのである。

②言葉の広がり「誇りとする・カウカオマイ」

この語は「自慢する、誇る、得意がる」を意味する。福音書には現れないが、37回の用例のうち35回がパウロ書簡(第二パウロ書簡も含めて)に用いられている。

ユダヤ人は神を「誇り」(ロマ二17)、律法を「誇りとし」ながら(ロマ二23)、律法を破って神を侮っているとパウロは批判する。さらにパウロは、肉や外面を「誇る」者を非難し(ガラ六13、2コリ五12)、ヤコブは「誇って」高慢になることを責めます(ヤコ四16)。

それに対して、パウロが「誇る」のは、主であり(1コリ一31)、キリスト・イエスであり(フィリ三3)、苦難であり(ロマ五3)、自分の弱さ(2コリ一二9)である。神はだれ一人神の前で「誇る」ことがないようにするために、世の無に等しい者を選んだ(1コリ一29)。だから、私たちの主イエス・キリストの十字架のほかに「誇る」ものがあつてはならない(ガラ六14)。

パウロは、自慢につながる誇りを徹底的に否定する。彼には、キリストの十字架に見た神の愛のほか「誇る」ものはない。神だけが、苦難を耐える希望を与える力を持つ方だからである。

福音書「マタイによる福音書9章35節―10章8節」

35 イエスは町や村を残らず回って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、ありとあらゆる病気や患いをいやされた。36 また、群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた。37 そこで、弟子たちに言われた。「収穫は多いが、働き手が少ない。38 だから、収穫のために働き手を送ってくださいるように、収穫の主に願いなさい。」

1 イエスは十二人の弟子を呼び寄せ、汚れた霊に対する権能をお授けになった。汚れた霊を追い出し、あらゆる病気や患いをいやすためであった。2 十二使徒の名は次のとおりである。まずペトロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレ、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネ、3 フィリポとバルトロマイ、トマスと徴税人のマタイ、アルファイの子ヤコブとタダイ、4 熱心党のシモン、それにイエスを裏切ったイスカリオテのユダである。

5 イエスはこの十二人を派遣するにあたり、次のように命じられた。「異邦人の道に行つてはならない。また、サマリア人の町に入つてはならない。6 むしろ、イスラエルの家の失われた羊のところへ行きなさい。7 行って、『天の国は近づいた』と宣べ伝えなさい。8 病人をいやし、死者を生き返らせ、重い皮膚病を患っている人を清くし、悪霊を追い払いなさい。ただで受けたのだから、ただで与えなさい。」

言葉の解説

36 節 ■「飼い主のいない羊」。民二七17を踏まえた表現。死の予告を受けたモーセが、民を「飼う者のいない羊の群れ」のようにしないでくださいと神に祈り、自分に代わる指導者を求めると、神はヨシユアを選び出す。「ヨシユア」のギリシア語形が「イエス」である。■

「深く憐れまれた」。「はらわた」を意味する名詞スプランクノンから派生した動詞。古代の人々は「はらわた」を感情の座と捉えていた。新約聖書における「はらわた」は「愛・同情・

憐れみの起こる場所」だけでなく、それらの感情そのものをも表す。動詞形スプランクニゾマイは新約聖書で12回用いられるが、そのうち9例は奇跡を行う際などのイエスの心を表す（マタ九36、一四14、二〇34、マコ一41、六34、八2、九22、ルカ七13）。残りの3例はたとえの中で、天の父を想起させるような人物に対して用いられている。（マター一八27、ルカ十33、一五20）。

37節■「収穫」。ここでは宣教によって獲得される人々を指す。また、黙示文学において「収穫」は「最後の裁き」を指すので、「収穫の主」が送り出す「働き手」とは終末を告げるべき者を示す。

2節■「十二使徒」。「十二」という数字はイスラエルの十二部族に基づく（マター一九28）。十二人の弟子から始まる教会に、「新しいイスラエル」が実現している。■「ペトロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネ」。十二人のリストはマコ三16―19、ルカ六13―16、使一13にも見られるが、完全には一致しておらず、細部には相違がある。

7節■「天の国は近づいた」。弟子たちは洗礼者ヨハネ（三2）やイエス（四17）の活動を継承する。

①四福音書は、それぞれの福音記者の神学的意図に従って編集されている。今はの福音を読むと、マタイ福音記者の編集意図の一面を知ることができる。

今日の福音の直前には次のような言葉が述べられている。「イエスは町や村を残らず回って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、ありとあらゆる病気や患いをいやされた」（九35）。これは、ガリラヤでの宣教を開始するイエスを述べた四23とよく似ている。さらにそれぞれに続く九36と五1は「群衆を」見て」という動詞によって対応している。

これらのことから、四23―九34と九35以降は、類似した構造を持つ二つの大きな段落と考えることができる。四23―九34では、イエスの宣教開始を述べた後（四23）、イエスの教えが説かれる「山上の説教」が続く（五1―七29）、続く八1―九34では、イエスのさまざまな業を語って段落が閉じられている。九35から始まる次の段落では、まず四23と重なる文章で始まり（九35）、次に十二人の選びと派遣に触れ（九36―14）、次にイエスの教えが「宣教派遣の説教」として展開される。このように二つの段落の構成をそろえたのは、イエスの教えと業（四23―九34）が十二人の弟子に引き継がれ、彼らを通して今もイエスが働いていることを示すためであろう（九35以降）。

今日の福音は「宣教派遣」をテーマとする段落の冒頭部にあたる。イエスは、羊飼いからはぐれた羊のように疲れ果てた群衆を「見て、深く憐れ」む。一四14でも舟から上がったイエスが「大勢の群衆を見て深く憐れみ、その中の病人をいやされた」と述べられている。イエスの行動の動機はいつも「憐れむ」ことにある。「憐れむ」と訳された言葉は、もともと「はらわた」を意味する名詞スプランクノンから派生した動詞である。マタイ福音書には、「わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない」というホセア書六6の言葉が二回引用され（九13、一二7）、イエスの活動が人々に対する憐れみの心に支えられていることが示されている。

イエスが弟子たちを派遣するのは、この活動を継承させるためである。「収穫（刈

り入れ）」は「世の終わり」を表すたとえである（マタ二三39参照）。「収穫の主」である神とイエスによって派遣される弟子たちは、「天の国は近づいた」（7節）と宣言し、力ある業を行うことによって終末の到来を告知知らせる。

十二人の弟子たちは「異邦人の道、サマリア人の町に行ってはならない」と命じられている。マタイ福音書が著されたのは紀元七〇年以後と考えられている。そのころには異邦人に対する宣教がすでに行われていた。それにもかかわらず、ここにそれを禁じるような言葉がある理由は、この箇所以降に見られる次のような記述から推測することができる。

十 18：「異邦人に証しをする」

二二 43：「神の国はあなたたち（ユダヤ人）から取り上げられ、それにふさわしい実を結ぶ民族に与えられる」

二四 14：「御国のこの福音はあらゆる民への証しとして、全世界に宣べ伝えられる。それから、終わりが来る」

二八 19：「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい」

このようにマタイは「救い」を段階的に捉えている。「救い」はまずユダヤ人に告げられ、それから異邦人に広げられてゆく。十二人の弟子による宣教は、民族を越えた「新しいイスラエル」としての教会として結実する。神の愛は今もすべての人に向けてられている。

## ②言葉の広がり「熱心党・カナナイオス」

この語は新約聖書ではマタ十4とその並行箇所マコ三18で、十二弟子の一人、二番目のシモンの添え名としてのみ使われている。この語は「カナ出身の人」の意味にもなりえるが、ルカ六15と使一13のリストではシモンの添え名は「熱心党（ゼーローテース）」とあるので、この語をアラム語カナナツヤ（熱心な人）のギリシア語化と説明するのが普通である。新共同訳もこの解釈に立ち、「熱心党」と訳している。

熱心党の起源は明白ではないが、「ローマに対するユダヤ独立戦争の戦士」であったのは確かである。この運動はただ政治的なもので終わらず、「神のための熱心」という宗教的な側面をも強くもっていた。だから、彼らは「YHWHのほかに主はなく、神殿のほかに税はなく、熱心党のほかに友はない」というスローガンを掲げ、ローマへの抵抗運動をしばしば立ち上げている。

しかし、70年のエルサレム滅亡をはじめ、ローマの弾圧によって、制圧されていた。